

# 新 史都萩

発行 / 平成29年4月15日 編集・発行 / 史都萩を愛する会



新学期、桜のトンネルー春日神社 (下瀬信雄氏撮影)

## 山口が忘れた殿様の遺産

### —世界に散らばる斉元公の浮世絵—

慶應義塾大学教授 津田 眞弓

はじめに

地元で長らく看過されていた宝があると思し上げたならば、萩の皆様はどうお思いになるだろうか。それは長州藩十一代藩主毛利斉元(なつもと)の八十に迫る浮世絵。彼のコレクションではない、彼が制作した品で

ある。八十はあくまで図柄の数だから、現存する枚数は計り知れない。それが欧米の主要な美術館や博物館の多くに収蔵され、長らく日本より海の向こうで愛されている。江戸時代から少なくとも大正時代までは、旧長州藩の家の中では

知る人ぞ知るものだったようだが(山口県文書館蔵『斉元公御戯作集』)、山口県文書館、毛利博物館、萩博物館、萩美術館・浦上記念館でも所蔵が確認されない、現代の山口の皆様が忘れてしまった宝、といっても過言ではない資料群である。

この十年全容の解明に努めているが、ようやく萩で稿を書く機会を得た。これをご縁に、当地における殿様の浮世絵の記憶——様々な伝聞はもちろん、地元の家が掘り起こされることを願っている。

### 謎の狂歌師

#### 江戸廻花也

さて、文政七年(一八二四)に藩主になった斉元公は、主に「柳桜亭江戸廻花也」という狂歌の戯号を用いて私家版の浮世絵を作成していた。それは、狂歌連で新春の挨拶に仲間へ配るために制作された「狂歌摺物」と呼ばれるものである。一般売りされた品よりも稀少で、制作費をかけた豪華なものや芸術性の高いものが多く、海外に



図1 溪斎英泉 「桜花の隅田川を歩く美女と童女」 文政中期、津田眞弓蔵

(右の狂歌、翻刻) 江戸の花也 桜花ちらすひよくの裾縫につかいはなれぬ蝶も遊びつ (現代語訳) 花吹雪の中、美人が着る桜花を散らした比翼仕立ての裾縫いにも、比翼の鳥のように仲のいいつがいの蝶が二匹、戯れるように飛んでいる。

愛好家、研究者が多い。斉元公の摺物も当然ながら美しく作られており、欧米でのジャポニズムの流行に伴って早い時期からほとんどが海外に流出してしまった。その際に、「江戸廻花也」という人物に関する情報は付随しなかったようだ。摺物の研究は海外が先行し、かつ浮世絵の世界では絵師への興味が優先するから、大量に狂歌摺物を作った謎の人物として長らく放置され、制作された内容から役者や音曲に縁のある芸能関係者とのみ想像されていた(浅野秀剛「江戸の摺物展図録」解説、千葉市美術館、一九九七年)。つまり、彼の狂歌摺物は制作者が大名だとは知らずに世界で愛でられてきたのだ。浮世絵としての出来のほどが、このことをもってわかるだろう。カラーで図版が紹介できないので、可能ならば、インターネットで「ポストン美術館」(<http://www.mfa.org/>)のウェブサイトに行き、右上にある「Search」(検索)と書いてある枠に「surimono hananari」と打ち込んでみていただきたい。所蔵品の一覧が出てくる。その中で、所蔵番号「11.26729-22」が、斉元公が大量の摺物を制作していた証拠となる資料である。何故なら、これに関する江戸時代の情報が奇跡的に残っている

からだ。

絵は三枚続きで、しだれ桜の下に二代目岩井兼三郎(揚巻)・七代目市川團十郎(助六)・三代目尾上菊五郎(白酒売)を描いた歌舞伎の助六図になっている。

その絵には「柳桜亭花也」・「土筆亭和氣有丈」・「柳花亭風姿瑞垣」の三人による、「花あやめ江戸紫の色糸も浪花の水に結ぶ揚巻」・「鉢巻に江戸紫の横霞今ぞ浪花も春に成田屋」・「三ヶの津一とも人の愛やせむ富士の尾上に雪の白酒」と、大坂と役名や役者名を入れた狂歌が載る。

そして、江戸の戯作者の山東京山(京伝の弟)が、この摺物を友人の鈴木牧之に贈る際に付した一文を残している。(『山東京山書簡集』鈴木牧之記念館蔵)。

○春興のすりもの五枚進呈仕候。是は 松平大膳太夫様のすりもの也。

俳諧歌の御名 柳桜亭花也君といふ。

柳花亭風姿瑞垣・土筆亭和氣有丈 御替名也。

団十郎菊五郎久米三郎当春浪花に居り候ゆるの御うたなり。

(牧之宛京山書簡、文政十三年三月十六日)

文政十二年にあった江戸の大い火事のため、団十郎たちは大坂に行っていたから、京山の言は、内容、人名共にポストン美術館の摺物と一致する。この書簡によって、花也の正体が当時の長州藩主であること、かつては別人と思われていた狂歌師も、本人の別号だとわかる。

なぜ一介の戯作者が、殿様の浮世絵を友人に贈っているかといえ、この頃に京山の娘が斉元公に侍女として仕え、子供を産んでいるからである。それ故に京山は「長州君在江戸、御内用被仰付候事にて日々他行、筆をとるといまとまなかりし」(同前、天保六年十二月十三日)と、斉元公のために種々活動していたようだ。京山が主に仕事をしていた絵師と摺物の絵師もほぼ一致しているから、「御内用」に摺物制作の補助も含まれていたと考えられる。

狂歌摺物の全体像

全体のリストと狂歌類の翻刻は、以下のウェブサイトで公開している(津田真弓「江戸廻花也(長州藩主毛利斉元)の狂歌遊び」<http://user.keio.ac.jp/~sakura/hananari/>)。現在確認できる数は七十八種(摺物、七十六。肉筆画、二)。昨年(の十二月)に、オラ

ンダでこれまで報告されていなかった二種見つけたから(図1)、今後も数は増えよう。なお、図1の右肩に押しあてられた印は、仮に桜蝶印と名付けられている。印章またはその意匠が花也の目印でもあるので、ぜひお見知りおきを。

花也の摺物の特徴を挙げるとすれば以下の三点である。

- 一、摺物のテーマが歌舞伎役者と美人(主に芸者)に特化している。絵師は主として、初代歌川国貞、溪斎英泉、歌川国芳。
- 二、自身が作った端唄や清元節と思しい浄瑠璃など、俗謡の歌詞を狂歌と共に載せている。
- 三、音曲関係者と共に作った品に桜蝶印を用いる。

制作のごく初期、前藩主の養嗣子だった文政前期と思われる頃には、狂歌の師匠や一門の人々と共に古典的な画題で一般的な狂歌摺物を制作していたが、藩主となってからは次第に自分の趣味に特化した摺物を制作していった。それは狂歌摺物としては異色だから、芸能者とみなされたのも仕方がない。右の特徴を少し解説しよう。特徴の一、歌舞伎は先の助六図に見られる三人がご虫貞。特に尾上菊五郎の数が多。絵師はこ



図2 歌川国芳「見立『修紫田舎源氏』」、スコットランド国立博物館蔵

『源氏物語』を下敷きにした天保期の翻案小説を踏まえる。右から、桂樹(朧月夜・黄昏(夕顔)・阿古木(六条御息所))。内はいずれも下敷きになった原作の登場人物。

(桂樹の俗謡、翻刻) なせにこふしたうわきな人になつた。わしよりあつちからさせたおまへの上手口。月はまるいか、まるいか月か。とれかどふともこちや見へにくい。いろの浮世はあしなもののソリヤしれた事。花也戯述

(解説) 最後の「色の浮気は味なもの、ソリヤ知れた事」というフレーズを共通にする俗謡。何故こんな浮気な人になつた。向こうから行動させた、お前の上手口がにくい。——と女達と交流を重ねる光氏(光の君に擬す)を想起させる歌。朧月夜に相当する女性が描かれていたため、形が朧ろで容易に把握できない月が詞章に出てくる。



図3 柳桜亭花也肖像  
『狂歌鐘声集』天保七年五月序、茶梅亭文庫蔵

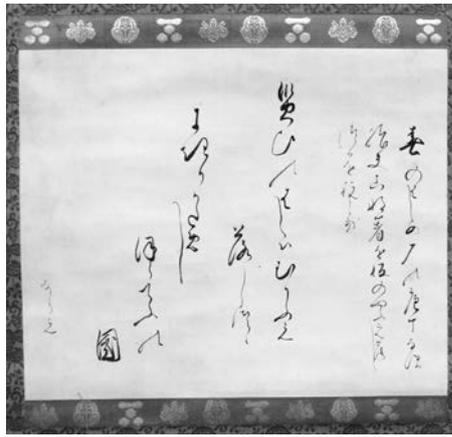


図4 「柳桜亭御自筆御染筆」  
毛利博物館蔵

(図4翻刻)  
春のはしめ雁の庖丁なす  
膳夫まな箸を板の向ふえ  
落しつるを祝して  
災ひのはしはむかふえ落  
しつ、  
にきりかためしほうてふ  
の国 なり元

(現代語訳)  
春の初め、雁を庖丁でさ  
ばく膳夫が、まな箸をま  
な板の向こうへ落とした  
のを祝って。  
災いの箸は向こうへ落と  
しても、庖丁は握りしめて  
いるとはすばらしい。  
斉元  
(災いの端を遠くへやっ  
て、防長の国をしつかり  
と守り治めているよ)

の頃浮世絵・絵入り小説で人気  
の高い三人。京山の仕事もこの  
三人が集中して請け負っている。  
特徴の二、俗謡の作詞にはか  
なり力がいって、例えば、  
ポストン美術館が蔵する「126816」。  
菊五郎と兼三郎が鳥追(門付けの  
音楽師)に扮した「初霞柳糸遊」  
と題された二枚組では、狂歌に  
添えて六二〇文字にも及ぶ詞章  
が、清元節の正本を模して書か  
れている。

特徴の三、桜蝶印は純粋な狂  
歌仲間との作には用いず、主と  
して音曲関係と思しい人々と共  
に用いられている。印章のみな  
らず、芸者たちが着物や扇、簪な  
どにトレードマークとして用い  
ているから、殿様を囲むグルー  
プがあつたのだろう。

なお摺物の中で最も注目され  
る作は、当時、身分や学問的能力  
を問わず幅広く人気を博してい  
た草双紙、柳亭種彦『修紫田舎源  
氏』を下敷きにした三枚組だろ  
う(図2)。今のマンガの先祖の  
ような絵入り小説から四編と十  
二編に出てくる名場面をそっく  
り用いている。十二編の刊行は  
天保五年(一八三四)だから、同  
年かそれ以後、花也が四十三歳  
で亡くなる天保七年までの間に  
作られた。残念ながらその死に  
よって、摺物の画期的な発展は

止まることになるが、狂歌と俗  
謡、そして人気の戯作が融合し  
たこの三枚組は、花也の摺物の  
一つの到達点になっている。

**藩主が狂歌を詠むこと**  
最後に、この人が何故、狂歌と  
俗謡に熱心だったかといえ、養  
父である先代の斉熙公と、当時  
の長府藩主の元義公の影響であ  
る。彼らも又同じ鹿都部真顔門  
下で、俗謡好きだった。特に元義  
公は清元節の名曲「梅の春」の作  
詞者としても知られている。そ  
して真顔には大名の弟子が少な  
からずいた。社交上の必要も最  
初はあつたことだろう。なお、真  
顔関連の資料には、これまで歴  
史領域では報告されていない齊  
元公の肖像がいくつか見られる  
(図3)。

また、絵師の八島定岡(岳亭)  
は『猿著聞集』(文政十一年刊)  
で斉元公について「仁の心ふか  
くおはして、よく下をあはれみ  
たまひけり」と評し、藩士の指導  
に狂歌を活用していたことを伝  
えている。そして図4に示した  
ように、毛利博物館にある一軸  
の自筆狂歌によれば、公の場の  
部下の失敗を狂歌で見事に救っ  
ている。斉元公にとつて狂歌は  
家中をまとめるコミニケイシ  
ョンツールでもあつた。

この人となり江戸文化の流  
行の中心にいる人々を巻き込ん  
で、江戸の花だと思得を切る、そ  
の名にふさわしい摺物を作り続  
けることを可能にしたのだと思  
う。斉元公の一群の狂歌摺物は、  
身分を越えた人々との交流なく  
しては生まれえない。まさに江戸  
時代の文化的流行がどういう場  
で生成され、あるいは享受され  
たかを再考させてくれる貴重な  
証左である。

参考文献：  
津田真弓「The Daimyo as Kabuki  
Fan and Kyōka Poet. Surimono  
Commissioned by Edo no  
Hanarari」(John Carpenter 編  
『Reading Surimono: The Interplay  
of Text and Image in Japanese  
Prints』、二〇〇八年)

津田真弓「柳桜亭江戸廻花也(長  
州藩主毛利斉元)の狂歌摺物——  
伝記と『斉元公御戯作集』を中心  
に」(『浮世絵芸術』一六一号、二  
〇一〇年八月)

付記：  
本文中の原文は、読みやすさの  
ため適宜漢字にし句読点などを  
加えた。図版の翻刻は原文のま  
まとした。